

登山道から考える持続可能な観光資源の保護

Considering Sustainable Tourism Resource Conservation from the Perspective of Mountain Trails



曾我一正 SOGA, Kazumasa

中部大学人文学部教授

愛知県出身。ロンドン大学法学博士（Ph.D.）。専門分野 知的財産法・産学官連携。研究テーマ 知的財産と個人情報保護・持続可能な産学官連携プロジェクト。主な著書には *The Legal Protection of Trade Secrets in Japan: A Comparative Study of English and German Law*（2003年、成文堂）などがある。

ABSTRACT

Climbing mountains has been one of the most popular activities in Japan. It does not cost much when compared to other activities such as golf or scuba diving. Recreational walking is particularly popular with retired people, easy to start and cheap to continue to pursue. Trails in the mountains have been damaged due to the natural disasters perhaps exacerbated by the recent climate change, which is predicted to continue in the future. Repairing trails is expensive and laborious. Most Japanese local governments no longer have surplus budget to manage such trails. Moreover, those trails which were historically maintained on a voluntary basis, are now left abandoned as volunteers are largely elderly and not able to continue to repair them. This study investigates potential methods that may be used to address and solve the issues described in the above. As examples, we can consider the city of Takayama and Asahikawa. Takayama is a base for the Japanese Northern Alps mountains area and Asahikawa for the Taisetsu (Daisetsu) mountains area. Both areas have several well-known peaks and can offer people easy access, including ropeways, to walking trails. Comparative method will be used for the purpose of the study.

1. プロジェクトの趣旨

NHKの日本百名山や田中陽希さんの「一筆書き」シリーズでますます人気が出ている登山であるが、登山人口の増加に伴って様々な問題が噴出している。加えて近年の気候変動による大雨や気温上昇に伴う登山道の崩落や生態系の変化が問題を一層深刻なものにしている。身近な例を挙げると、百名山の一座である伊吹山は昨年7月12日の大雨による登山道の崩落によって麓からの登山は禁止されており、崩落からかなり時間が経っても修復はされていない。同じく百名山の恵那山頂上への最短ルートである広河原登山口も崩落のため長期間閉鎖が続いていた。山の崩落は自然現象であるので人間にとって為す術もないが、それをどうして長期間放置してあるのか。

地方の衰退による産業の空洞化や人口減少等の理由により地方自治体には資金がない。登山道の修繕に使う資金があるならば住民福祉や町のインフラにそれを回すのが優先であり、且つそれが自治体住民の総意である。また、これまでボランティアで登山道や地区のインフラ整備を担ってきた方々の高齢化に伴い、これ以上そのような善意に頼れないと言った切実な事情がある。このような現状を踏まえてどうしたら登山道や登山のインフラを維持していくことができるのか、持続可能な観光資源の保護という観点からこの問題の解決策を考えるのがこのプロジェクトの趣旨である。

2. 調査方法

北アルプスの山々の登山基地となる高山市と大雪山系の登山基地である旭川市を調査対象基地とし、二地域を比較するcomparative methodを方法論として採用する。両地域ともに名の通っ

た複数の山頂まで比較的短時間（日帰り可能）で容易に（初級から中級程度）にアクセスが可能であり、またロープウェイも設置されている古くからの観光地域でもある。高山市と旭川市は共に地域の中核都市であり、観光だけに頼っている自治体ではない。反面、高山市は登山口を含む地域全域が高山市であるのに対し、旭川市は登山口や観光資源となる山を持っていない。その為、この調査は旭川地域として層雲峡や黒岳登山口を持つ上川町と旭岳登山口を持つ東川町を含むこととする。また高山市の近隣には空港はない反面、旭川市近隣の自治体には空港がある等の相違点がある。

調査は高山と旭川の両地域に行き実際に登山活動をすると同時に自治体や観光協会、宿泊施設やロープウェイを含む観光案内等のステークホルダーへのインタビューをするものとする。調査は一定期間をおいて2回するものとし、1回目は主に現地での問題点の明確化、2回目までの間に明確化された問題点の改善方法の提言等のやり取りをし、2回目でそれについての議論を行った上で問題点の再明確化、その後両地域の比較をしながら提言としてのまとめをする。

3. 調査報告

正にこのプロジェクトのタイトルを地で行くような話であるが、調査対象の高山市から乗鞍岳へのアクセスである乗鞍スカイラインが大雨で崩落、今年度は期間中閉鎖となり、新穂高ロープウェイがお盆前まで、更に8月下旬から11月までまた動かなかった。その為、高山市市長公室の上田伸也秘書係長にご尽力を頂いたにもかかわらず、高山地域での現地調査ができなくなった。

旭川への1回目の調査では大雨が続き、旭川の南西にある南暑寒別岳のみに1日行くことができたものの異常な酷暑でスズメバチの被害がかなり多く、多分に漏れず私も途中でスズメバチに追われる羽目になり、途中の展望台で引き返すこととなった。（南暑寒別岳登山口はラムサール条約登録湿地である雨竜沼湿原の入場地を兼ねており協力金500円をそこで徴収している。その協力金に関する調査。）そのような天候であったので、現地の関係者の方々のご理解によりインタビューの日程をずらしてもらい日程を繰り上げて帰名することとなった。

2回目の現地調査までの期間にメールでのやり取りの後の現地調査で唯一天気が良かった日に黒岳から「お鉢周り」をし、午後2時位から雨が上がった日に「せっかくきたのだから少しでも現地調査を」と旭岳ビジターセンターの三島光博所長のご厚意で姿見から裾合平への登山道調査ができた。（天気の問題がなければ朝から姿見、旭岳頂上より裾合平を経て姿見というコースタイム6時間の調査を予定していた。）百名山であり、北海道を代表する観光地であるせいか登山道はとてもよく整備されていた。

前回の調査で指摘していた利用者負担の提言として、協力金の義務化や駐車場の有料化について、協力金導入についてはロープウェイのない銀泉台登山口でマイカー規制時に約200万円（ただしそれに伴う人件費等の諸経費を差し引くと利益はほとんどなし）、上川町への登山道整備のための寄付が約70万円であった。駐車場の有料化について旭岳ロープウェイ駐車場は国立公園内にあり管轄が複雑な為、統一できないが有料化の方向で進んでいる反面、現在無料の黒岳ロープウェイ駐車場は有料化しても通年では人件費の方がかかってしまうので二の足を踏んでいるとの事である。（北海道の場合、駐車場は冬の雪かきに非常に費用がかかる。）

4. ダイビングと比較した登山

登山者は山のある地域にお金を落とさないと言われる。これはダイビングと比較して大きな違いである。金持ちの趣味と言われるダイビングの場合、一日3ダイブで最低2万円かかり、飛行機利用の場合はダイビングした（「する」ではない）当日に飛行機に乗れないため飛行機で移動の場合は最低一泊はしなければならない。一緒にダイビングをした仲間とダイビング後に食事に行くことも多い。ダイバーはその地域にかなりのお金を落とすため、ダイバーによって成り立っているに等しい地域も少なくない。ゴミだけ残すと言われる登山者とは大きく異なる。

更にダイビングの場合「協力金」を徴収しやすい。ダイバーの憧れであるパラオでは州ごとに発行するマリンスポーツ許可証（パーミット）がなければダイビングをすることができず、ロックアイランドでは6日間で50ドル、昨年バリ島でも入海料として1日約千円徴収されることになった。違反者には罰金があるだけでなく、業者にも厳しい罰則があるため徴収漏れはほとんどない。またモルジブではグリーン税が一泊ごとに6ドル課される為（モルジブではマリンスポーツ目的の旅行者が多い）やはり漏れなく徴収できる。反面、入山料というのは人件費が余分にかるだけでなく登山口が多いため、徴収漏れが多くなる可能性がある。

5. まとめと提言

今後、登山道を維持していくためには利用者負担の考え方を導入する必要がある。その為の課金方法を模索していく必要があるのではないか。

北海道では宿泊税（観光税）の導入が議論されており、一律100円の導入が検討されている。この税は宿泊施設のある自治体にまわることになるため、例えば旭川市に宿泊した場合、登山道のある上川町や東川町には一銭も入らない。観光資源の維持を謳っておきながら、この税金はその目的を果たしていないことになる。この問題を解決するために一律100円ではなく200円（それでも安いという意見も多い）にして内100円は宿泊施設のある自治体に、あとの100円は道が管理して観光保全のために配分すべきではないかと考える。

登山期間中、平日も登山を楽しむ観光客が多い高山地区と比べ、旭川地区は週末のみ、特に紅葉期に観光客が集中してしまう。道内の登山者の多くは自家用車で週末に登山を楽しむため、平日に登山をする（インバウンドを含む）道外からの観光客を誘致する必要がある。道外からの観光客は道内のそれと比べると滞在日数が長いためである。旭川空港に関西方面からの直行便が一便も就航していないのには驚いたが、季節便になってしまった名古屋からの直行便の他にも東京以外からの国内便を増やす努力をすべきである。また、政治的な問題のない、台湾やタイからの直行便乗り入れも喫緊の課題である。

上記は提言の一部であるが、登山道維持の為の費用として道に考えて頂きたい点である。今回の調査では現地に行っていない高山であるが昨年までの経験を基に大雪地域と比較する限り、インバウンド対策、ロープウェイでの登山者や駐車場での課金制度ともに完成度の高いシステムが構築されている。反面、解決されていない問題として高山市は交通渋滞を挙げている。高山（自治体ではない点に注意）では「お金を落とさない」登山者より、お金を落とす観光者に重点を置いている点は十分理解できるものの「お金を落とす」登山者を呼び込む戦略を立てるのは如何か。

私も実際に行くまでは分からなかったが高山市内から御嶽山ロープウェイ乗り場まで車で約1時間で行ける。乗鞍岳へはスカイラインで、焼岳の新中の湯登山口にも約1時間でアクセスできる。高山をベースに100名山3座を制覇できるのは登山者にとって非常に魅力的である上、新穂高ロープウェイを使えば西穂高岳（もしくは独標）や槍・穂高の起点になる。そういった宣伝を

SNS等で発信して高山に宿泊してお金を落としてもらう、そしてそこからの収益の一部を登山道整備に充てるといった循環を作ることによって持続可能な登山道の維持が可能となるのではないかと。

はじめに予定していたプロジェクトは未完に終わったものの、以上を報告とする。この場を借りて今回の調査の資料提供等、非常な貢献をしてくださった層雲峡観光協会事務局長の中島慎一、北アルプスと北海道の違いとして山小屋の存在、そしてその登山道維持に対する役割という重要な視点をご指摘頂いた旭川市観光課の村山俊貴の両氏に最大限の感謝を記し、結びとしたい。



曾我：今日は、入試事務課の泉田さんにご参加いただいております。多分僕とは格が違うぐらいいろいろな山に登っていて、僕よりは遥かにこの地域の山に関しても、またちょっと遠くの山に関しても、それから山泊ということについても、知識が深いと思うのですが、山小屋、それから山泊ということに関して、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

泉田：そうですね。15年ぐらい前、登山を始めた最初の頃は、専ら日帰りでした。徐々に実力をつけてからは、行きたい山、チャレンジしたい山が増えてきて、山小屋に泊まるようになったということが、まず第1段階としてあります。

小屋であれば、きちんと寝床も用意していただいて、夕ご飯、朝ご飯も出していただけるので、最初の頃は、ちょっとホテルにでも泊まるぐらいの感覚で行くんですね。しかし、実際は山小屋というのは、物を運ぶのが大変な場所にあるものですから、それなりに厳しいルール、暗黙のルールがあります。たとえば、夜は8時には寝なければいけないとか、水は節約して使いましょとかいったルールです。そういったことも覚えながら泊まるようになると、ちょっと普通の街中で泊まるホテルとは違う。ちょっと厳しいルールがある宿というイメージになっていきます。

最近ではもう小屋に泊まることも少なくなって、自分でテントを担いで行くようになったのですが、やはり何よりも時間の自由が利くという点、あと何よりもコストの面でメリットがありますね。小屋に泊まると1万円近くかかるものが、テント泊ですと1000円、2000円で1泊泊まれるので、大きな違いを楽しみながら、適宜小屋も使っています。

もう一つ、先ほど触れられた利用者負担の考え方についてですが、これは世代間で差があるようです。若い人は「しょうがないでしょう、出さなきゃ」というのが基本概念ですね。

曾我：多分泉田さんもそっちの方だと思います。僕が今50代の真ん中ぐらいなのですが、そこら辺で上と下が分かれるような気がします。50代半ばを境に、上の方の人は、「ただ」が当たり前という考え方です。協力金などを出さない人というのは、その辺の世代なのです。

例えば、黒岳に行った時に、お手洗いを使った「おばさん」が、「500円も払って入ってきたわよ」などと叫んでいたのを聞くにつけ、やはりそういう考えなのかなというふうに思うのですが。泉田さん、個人的には、利用者負担の考え方はどう思われますか。

泉田：利用者負担、大賛成です。実際、テントを担いで行くときは、食料も一緒に積んでいきます。水や食料を積んでいくのですが、やはりだんだんとしんどくなってきて、体への負担も大きくなってきました。ですので、できるだけ山小屋で軽食メニュー、例えば、1,000

円のカレーとか、800円の生ビールとか、そういったものを買って食べるようになってきました。そうすることによって、その小屋の維持や登山道の維持に繋がるようなことであるならば、その場でできるだけお金を落とすということは、意識していると思います。協力金もそうです。知り合いなどとも、そのような話はします。

曾我：ありがとうございます。では、大御所柳谷先生にも伺ってみましょう。柳谷先生は5歳の頃から、あの槍ヶ岳に登っているそうです。槍ヶ岳というのは、非常にレベルが高い山で、日帰りというのは普通ありえない山ですので、山小屋に関して、どう思われてるかをお聞かせください。あとご親戚が、山小屋を経営されてる側の方なので、その辺のお話も少しフロアの方にさせていただきませんか。

柳谷：はい。親戚が槍ヶ岳山荘グループという企業を経営しています。槍ヶ岳山荘は、この写真の左端に見えている山小屋です（図1）。



図1. 槍ヶ岳山荘（左肩の上）

今は650人ぐらいを収容できる大きな小屋になっていますが、最初は本当に掘っ立て小屋みたいなものを祖父の時代に作ったのが始まりです。それを叔父が継いで、次にいところが継いで、今はその息子が社長になっています。槍ヶ岳山荘、南岳山荘、それから上高地から槍ヶ岳に至る途中にある槍沢ロッジ、それから、安曇野から上がってこの槍の右の方の東尾根からくる通称「表銀座」にある大天井ヒュッテ、それからあと、上高地から穂高連峰へ向かう岳沢というところにある岳沢小屋の5軒の山小屋をやっています。

そうした山小屋では、毎年、シーズンが始まる前にスタッフが上って、みんなで途中の登山道を修理していて、登っていくと、途中でスタッフが作業をしているところに出くわすのです。それは見知った小屋の人たちで、こんなところまで降りてきて作業をしているのかと、非常に感心するわけなのです。冬の間に雪崩で木が押し倒されて道を塞いでいたり、積んであった石がみんな崩れて落ちていたり、それを全部取り除いて、以前シェルパの人たちが来ていた頃に伝わった石組の技術に倣って組み直したりするのです。あと、下のほうでは、クマザサが藪になってしまっていて道を塞ぐので、それを刈って通れるようにしたりする作業があります。アルバイトの若い人たちなども、みんなそういった仕事に駆り出されます。

小屋の人たちは、そんな感じで登山道を維持しているのですが、それを当然のこととして考えているようです。自分たちのところに来てもらうには、その道を通るしかないわけ

で、自分たちが山小屋経営を生業としていくためには、そこを通れるようにするのは当然のこと、というふうに考えているのです。受益者負担ということですね。

私のいとこの代の時に、バイオトイレみたいなものを普及させたという歴史がありますがけれど、バイオトイレも、結局、最後はヘリで肥料になった排泄物を釣って下さないといけないわけなんですね。その費用はさすがに相当かかりますが、それは受益者負担。

上がってくる途中にある公衆トイレなどは有料のところもあります。焼け石に水だとは言っていますけれど、そういう意識を持っていただくという意味で、多少なりともお金は取っているということなのでしょう。これは利用者負担。

曾我：利用者負担の考え方って、先生はどう思われますか。

柳谷：率直に言うとお金がばれるのですが、昔は自然の野山に入るのに、どうしてお金を払わなければいけないのだというふうに、当然、思っていたわけです。しかし、あの登山道の整備のされ方からすれば、そうも言えない。

実は、私、こちらに来たばかりの頃、逆側、つまり飛騨の方から始めて登ったのです。それまでは、専ら松本側から登っていたのですが、飛騨側から登ったらすぐ道が荒れているのですよ。途中の川の橋が落ちてしまっていて、仕方がないので、丸太を引きずってきて渡して、そこにしがみついてようやく渡った。「これはひどいな、こっち側は整備する人が誰もいないのかな」と思った記憶があります。そういうようなことがあって、誰かがお金出さないと整備は無理なのだなと実感するようになりました。小屋がある側は自分たちのためにちゃんと登山道を整備するのだけど、下の方にしか小屋がない逆側は、結局、整備する人がいないという状態なのですね。自治体がやるといったら、先ほど曾我先生もおっしゃったように、他のことにお金を使ってくれという市民たちがいるわけですよね。だから、なかなか難しい。だとすれば、利用者が払うしかないというふうには思うようになりました。

曾我：ありがとうございます。今おっしゃっていただいたように、長野というのは、山で観光というベクトルができていますね。しかし、岐阜になると、温泉などの方にちょっとずれているところがあるので、コンセンサスが取りにくいようです。登山道の整備に関しても、圧倒的に長野県の方が綺麗になっているのと、あと長野県側からのほうが、登り易い地形ということもあるかとは思いますが。地形の関係ではどうしようもないのですが。そういうことは僕もわかってきました。

あと、私の個人的な感想なのですが、先ほど、泉田さんが今、山小屋は1泊1万円ぐらいすると言ってくださったのですが、柳谷先生のご親戚が経営されてるところでは、1万2、3千円するのです。でも、料理の内容を考えたり、下から運んでくる手間を考えたりすると、僕は結構、安いんじゃないかなという気はします。先ほど500円も払ってトイレに行っただと叫んでいたおばさんがいたと言いましたが、汚物をヘリで釣って下すコストを考えたら安いものだと思います。「500円で入れるの？」というふうに皆さんが考えてくださったら、多分もう少し持続可能になるのではないかという気がします。

こんな感じですけども、長々とお聴きありがとうございました。